

大野松之助の銭湯建築 —船岡温泉，藤ノ森湯，紫野温泉—

石川 祐一

1. 創業者・大野松之助

船岡温泉の創業者・大野松之助（1873～1955）は、旧上賀茂村の出身で、庭石商を営んでいたとされる（図1）¹⁾。庭石商時の動向は不詳だが、大正4年（1915）の大正御大典博覧会に庭石を出品した際の主催者からの感謝状が残っている。聞取りによれば、第一次大戦後の不況を契機に、旅館・浴場といったサービス業への変換を図ったとされる。

大正5年、娘・定の名義で、現北区紫野東藤ノ森町（藤ノ森湯所在地）の敷地を購入し、同地域への進出の足掛りとした。聞取りを加味すると、藤ノ森湯の建築（昭和5年）までの間、同敷地は庭石置場などに

利用したものと考えられる。

大正10年、現北区紫野南舟岡町の敷地を購入し、大正12年頃に旅館「船岡楼」とその附属浴場である「船岡温泉」を建築した（開業年代は不明）。船岡楼は、料理旅館の業態であったと伝わる。同敷地内の理髪店も同時期の開業と考えられる。

昭和3～4年頃に、南舟岡町に「紫野温泉」を開業している。また、昭和5年には、紫野東藤ノ森町に「藤ノ森湯」を開業する。この3浴場の他、借家経営を行っていたことが確認される。

2. 船岡温泉（旧船岡楼施設）

（写真1）

（1）旧船岡楼・船岡温泉の建物

現船岡温泉には、

- ① 船岡温泉脱衣場（木造2階建，棧瓦葺）
- ② 船岡温泉浴室（鉄筋コンクリート造平屋建）
- ③ 旧船岡楼（木造2階建，棧瓦葺）
- ④ 旧理髪店（木造2階建，棧瓦葺）
- ⑤ 旧調理場（木造2階建，棧瓦葺）

の建物が現存している。当初、船岡温泉は旅館・船岡楼の浴場施設として建てられたものであった。通りに面した石積には、庭



図1 大野松之助肖像画

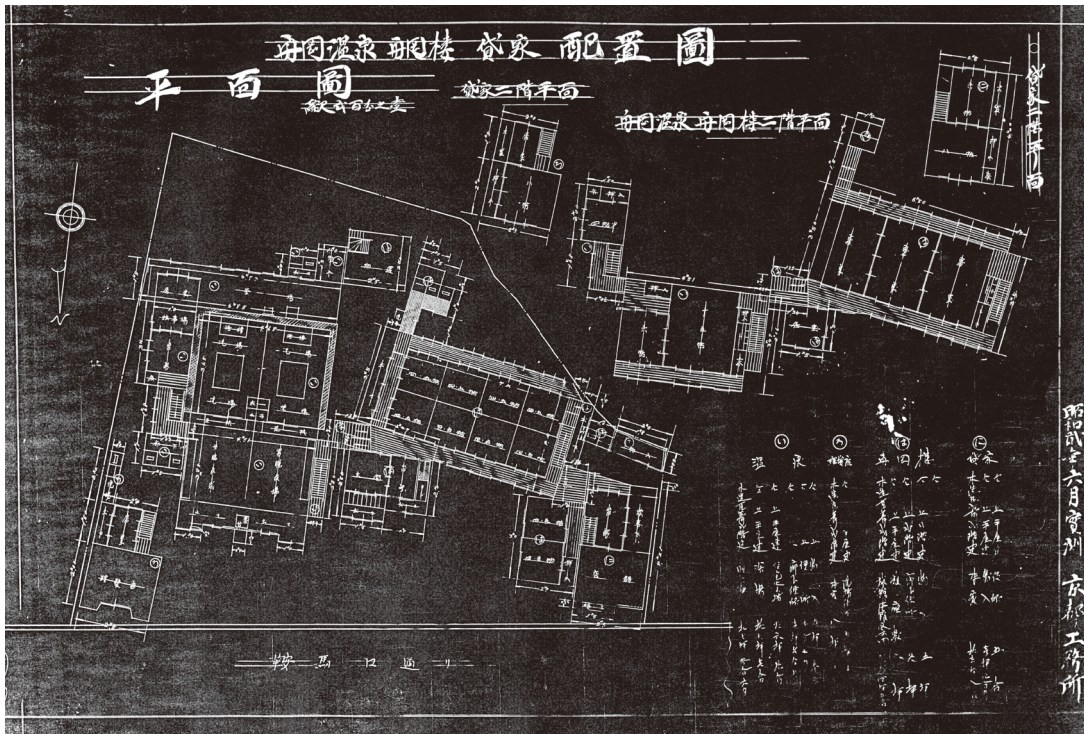


図2 「船岡温泉 船岡楼 貸家平面配置図」(昭和2年)

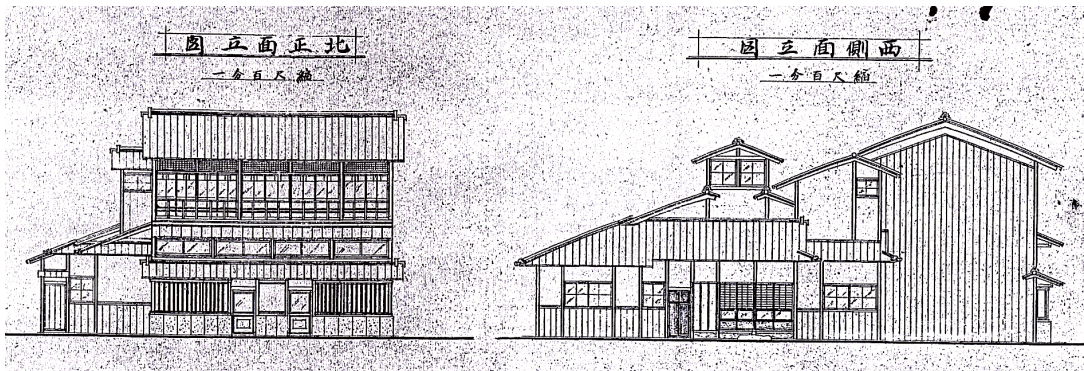


図3 「船岡温泉場 建築設計図」(部分/青焼図面を反転)



写真1 船岡温泉全景

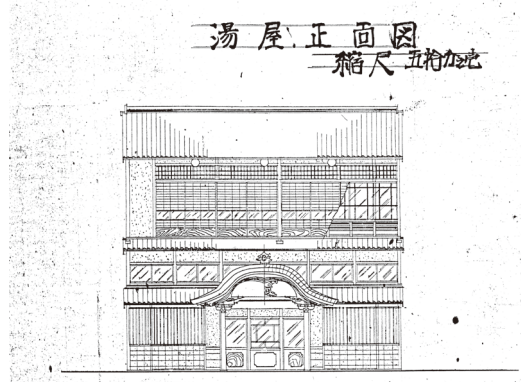


図4 「湯屋正面図」(昭和3年)(青焼図面を反転)

石商を営んでいた際に扱っていた貴船石を使用している。

船岡温泉脱衣場には、御幣が残り、大正12年(1923)に上棟したことが確認される。大正13年頃には船岡楼の主棟部分の北西に木造平屋の客室棟が増築された²⁾。また同様の時期に、旧船岡楼の西側に旧調理場が建築されている。

昭和2年に京都工務所により実測・作成された船岡楼の平面図(図2)³⁾には、船岡温泉、旧船岡楼(北西棟は平屋建)、旧理髪店、旧貸家が記載され、この時までには一群の建物が完成していることが分かる。

昭和7年には、船岡温泉浴室部分が鉄筋コンクリート造で改築されている⁴⁾。同時期に「電気風呂」を設け、入浴のみの利用が可能な浴場施設に転換し、「特殊船岡湯泉」を名乗った。

また、昭和10年頃には船岡楼の平屋建の北西棟が木造2階建て(現旧船岡楼北西棟)に改築されたと考えられる⁵⁾。次に各建物について記述する。

① 船岡温泉脱衣場(写真2～6)

設計時の図面(図3)⁶⁾により、木造2階建ての脱衣場と、煉瓦壁を用いた木造平屋建ての浴室、釜場が建築されたことが分かる(浴室、釜場は昭和7年に改築)。

同図面には河原林千之助の署名があるが、京都工務所との関係は不明である。前述した御幣より、施主・大野松之助、大工・佐々木長次郎により、大正12年(1923)2月20日に上棟したことが判明している。

同図面の外観と異なり、現在の脱衣場の



写真2 船岡温泉脱衣場外観



写真3 同内観



写真4 脱衣場天井の木彫



写真5 脱衣場松図欄間



写真6 脱衣場「肉弾三勇士」欄間

入口には唐破風が設けられている。昭和3年（1928）時の増築の申請書類（図4）⁷⁾から、唐破風はこの時期に設けられたものと確認される。

当初図面では、内部は表側に入口土間、番台を配する。奥が男女脱衣場となり、両脱衣場間に仕切り壁を設ける。番台部分は平成10年に改修されているが、男女両脱衣場部分は当初の平面をとどめている。

天井は格天井とし、中央部分に鞍馬天狗をモチーフとした木製彫刻が設けられている。これは鞍馬口通りにちなみ、鞍馬山の天狗を採用したものと伝わっている。

脱衣場の四周と男女脱衣場の仕切り壁には木彫を施した欄間が嵌められている。東側面は葵祭、賀茂競馬、西側面は今宮祭をモチーフにしていると伝わる。南側面には鶴・亀・松等、北側面には鳳凰と近江八景を連想させる城郭や松林などの風景が彫られる。

一方、男女脱衣室間の仕切壁上部には、筒状の爆弾を抱えた3人の兵士など、「肉弾三勇士」をテーマとした彫刻欄間が嵌められている。肉弾三勇士は、昭和7年（1932）の上海事変における兵士の自爆事件を題材としたもので、同年以後に設置されたものである。間取りによれば、松之助の子息・伍一郎が出征時に上海で負傷したことが、「肉弾三勇士」を彫刻の題材とする契機となったとされる。

脱衣場内部には、「マジョリカタイル」と称される装飾タイル（以下、マジョリカタイルと呼称する）が貼られているが、これについても浴室改築時に年代が下がる可能性が高いと考えられる。

平成10年に1階部分のファサード壁面を外側に約1m移設する改修がなされたが、唐破風部分や柱材が移設され、基本的な外観はとどめられた。



写真7 船岡温泉浴室外観



写真9 渡り廊下部分内観



写真8 渡り廊下部分外観

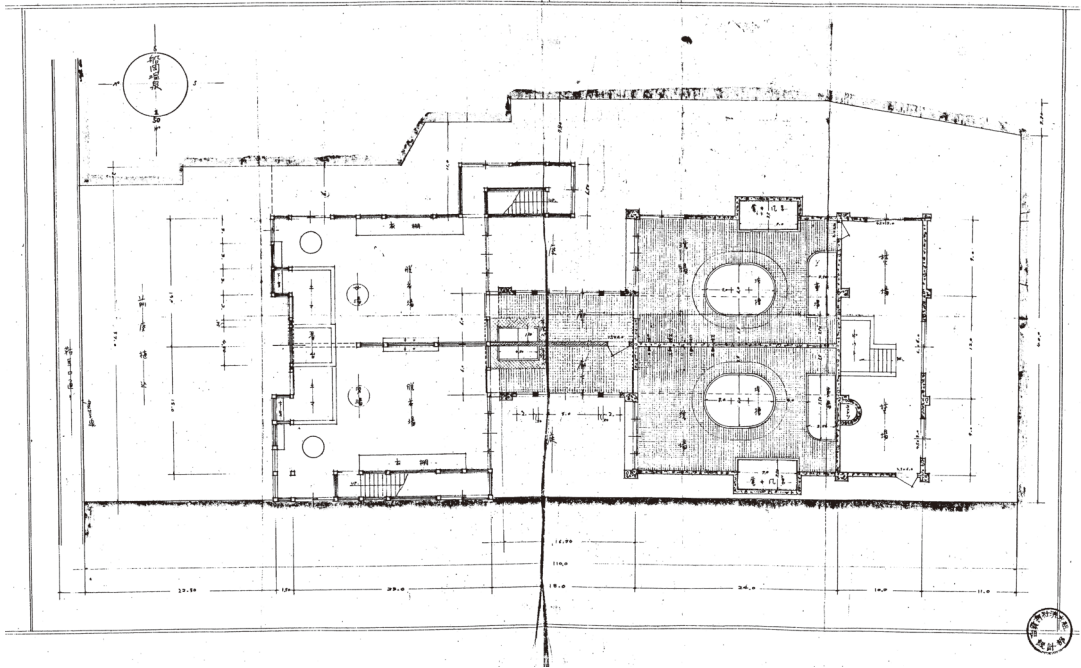


図5 船岡温泉浴室設計時平面図 (昭和7年)

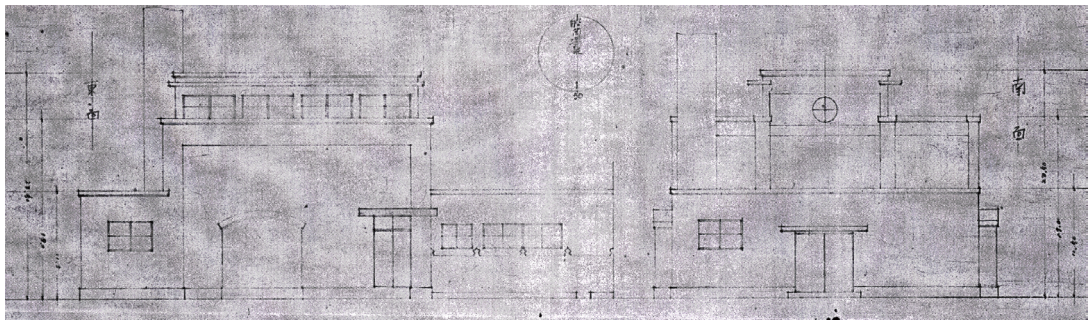


図6 浴室設計時立面図 (昭和7年) (青焼図面を反転)

② 船岡温泉浴室 (鉄筋コンクリート造平屋建) (写真7～9)

大正12年上棟の木造・煉瓦造の浴室・釜場部分を, 昭和7年に改築したものである。構造は鉄筋コンクリート造平屋建で, 建築申請書類 (図5・6) ⁸⁾ から設計・施工は清水組京都支店と確認される。

浴室と浴室・脱衣場間を結ぶ渡廊下部分からなる。渡廊下部分の外観には石造の橋の親柱, 欄干が用いられている。間取りによれば, この親柱, 欄干は千本鞍馬口交差点付近にあった菊水橋の部材を移築したも

のとされ, 橋名が刻まれている。渡廊下部分の内部は, 壁面にマジョリカタイルが貼られ, 洗面台が設けられている。

浴室は中央部分を一段上げ, 明かりをとる。正面となる北側と, 背面の南側には丸窓を設ける。当初は, 浴場の壁面にも装飾タイルが用いられていたが, 後の改修により現存していない。西側に浴室が拡張されたが, 全体の構成が残り, 昭和初期の鉄筋コンクリート造の浴室として貴重な遺構となっている。



写真10 旧船岡楼外観



写真12 主棟部分 2階室内観



写真11 主棟部分 2階室内観



写真13 旧理髪店外観

③ 旧船岡楼（写真10～12）

旧船岡楼は、玄関部分、主棟部分、北西棟部分からなる。前述のように、玄関棟・主棟は船岡温泉と同時期の建築と考えられる。北西棟部分は、昭和10年頃に改築された建物が現存する。

主棟部分は、1階に4畳半の和室を8室設け、それぞれ簡易な釣床が付く。2階は12畳の和室を3室配し、西側の室には大床を設ける。

北西棟部分は1, 2階とも、10畳の座敷と6畳の次の間からなる。

旅館としては、主棟1階の小室を通常の休憩・宿泊室、北西棟1, 2階室をより格の高い休憩・宿泊室として用いたものと推察される。また、主棟2階は3室を開け放し、宴会等のために大広間として利用したと伝わる。玄関棟は玄関室となっているが、当初は同室の西寄り部分が台所となっていた。



写真14 藤ノ森湯外観



写真16 1階旧脱衣場内観



写真15 全景



写真17 旧浴室内観

④ 旧理髪店 (写真13)

旧理髪店は、木造2階建、棧瓦葺で、平入屋根のファサードをモルタルで仕上げた「看板建築」である。

1階は表側が店舗、店舗の奥には通り土間と和室を設ける。店舗内部の腰部分にはマジョリカタイルが貼られている。2階は3室の和室が設けられている。

建築年代は船岡温泉(脱衣場)とほぼ同時期と考えられる。ただし、マジョリカタイルの使用から、昭和初期に改修された可能性も推察される。理髪店の廃業後、空き家となっていたが、現在は店舗として活用されている。

⑤ 旧調理場

昭和2年作成の実測図面⁹⁾に記載されている。鞍馬口通に接道し、同図面では1階

表側が店舗、奥が台所・炊事場と記されている。2階には和室2室が配される。同建物は船岡楼の調理場空間として用いられていたが、現在は倉庫として利用されている。

3. 藤ノ森湯 (写真14～17)

建物は、脱衣場棟、浴場・釜場棟、店舗棟とからなる。御幣から、建築年代は御幣より昭和5年(1930)11月の上棟、施工は山本辰吉(大工)、仙石要次郎(手伝)、吉田英輔(煉瓦)によるものと判明する。また、昭和5年の建築申請書類(図7・8)¹⁰⁾から、京都工務所の設計と確認できる。施工は施主の直営工事によるものと記載され、工事は前述の大工等が受注したものと考えられる。一体の工事として東側に隣接

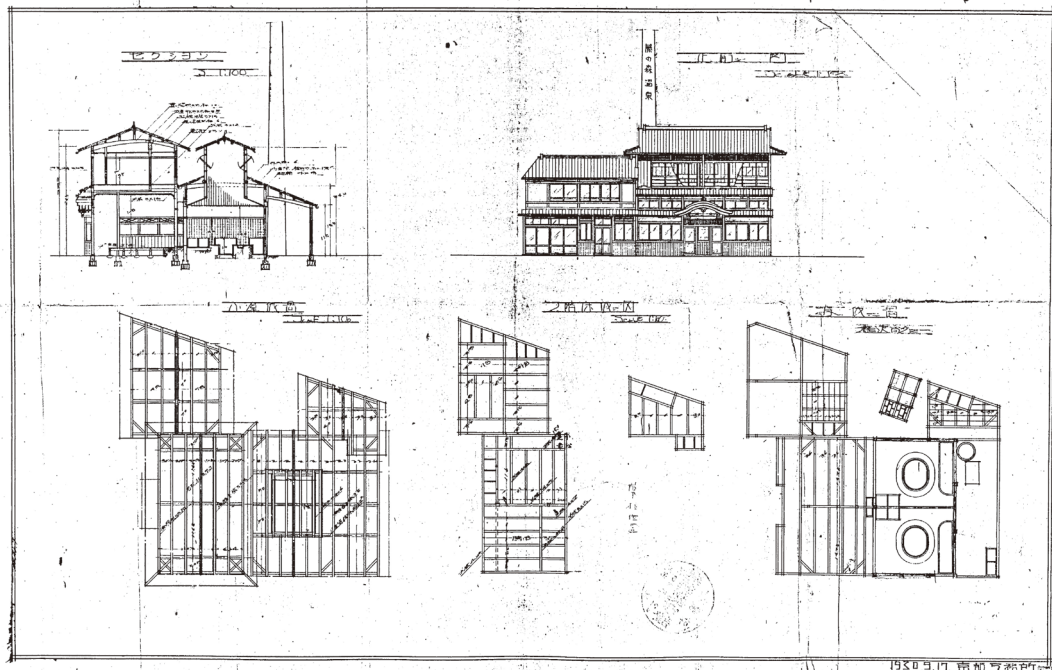


図7 藤ノ森湯設計時図面 (昭和5年) (青焼図面を反転)

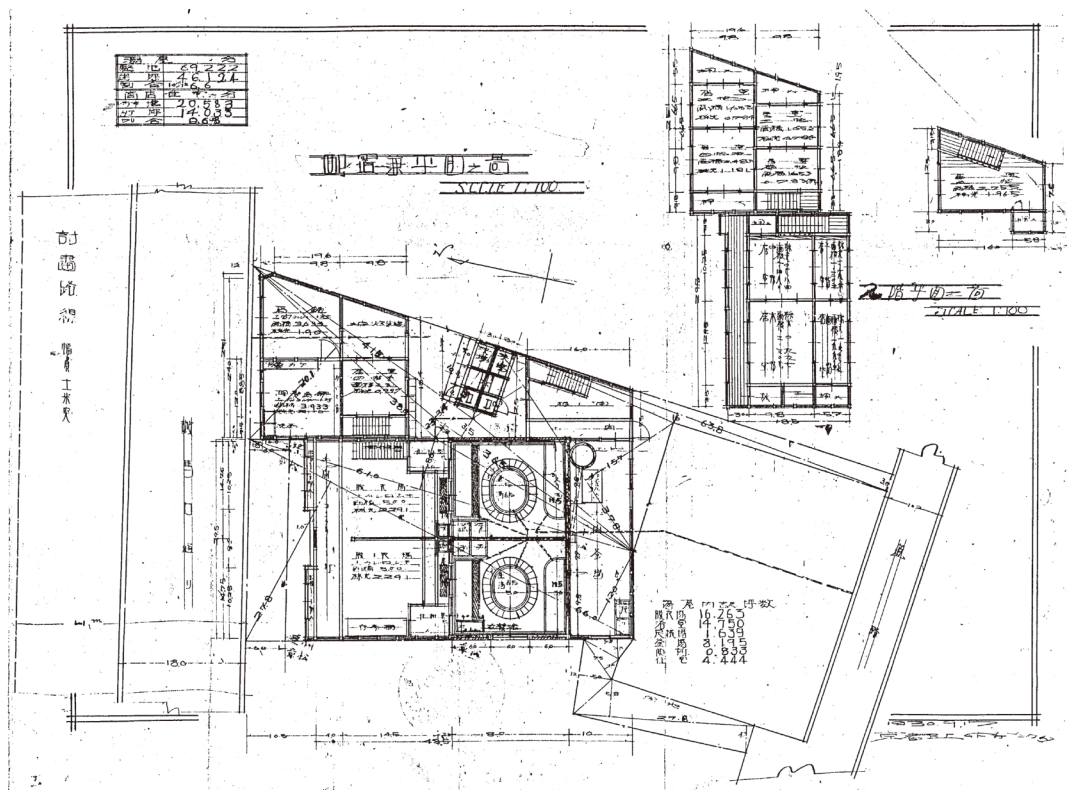


図8 藤ノ森湯設計時図面 (昭和5年) (青焼図面を反転)

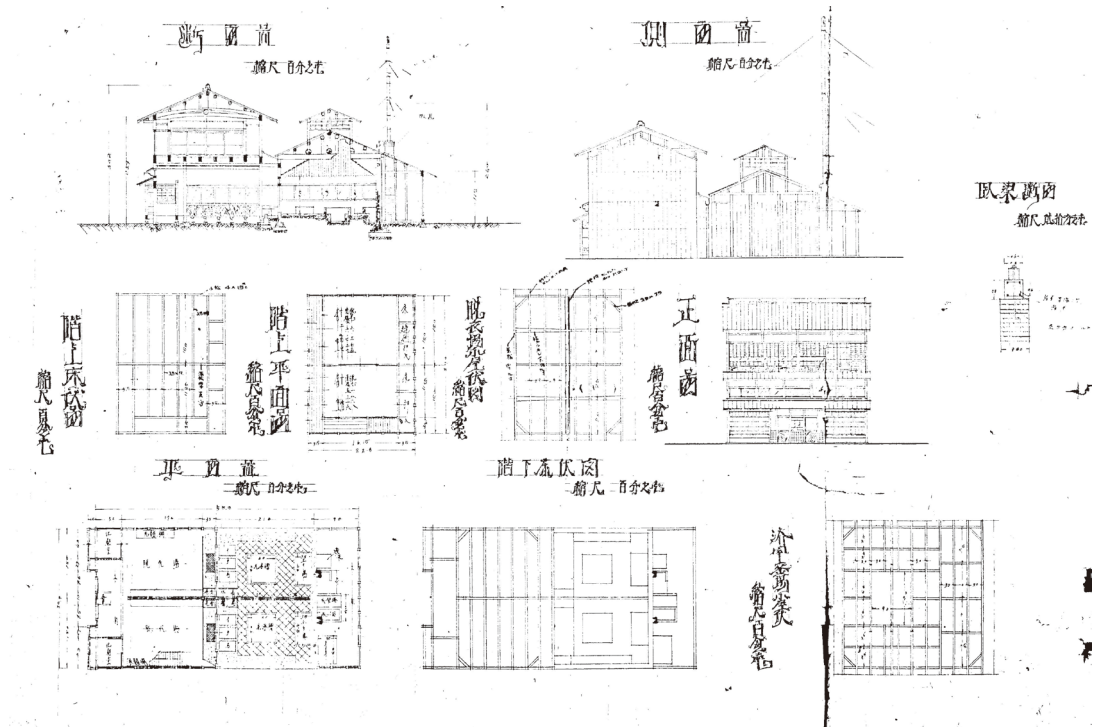


図9 藤ノ森湯設計時図面 (昭和4年) (青焼図面を反転)

する店舗棟も建築されている。申請用図面では店舗棟には理髪店が入居したことが分かる。

脱衣場棟は木造2階建、棧瓦葺で、鞍馬口通に平入に建つ。唐破風を設け、ガラス窓下部の腰壁にマジョリカタイルを貼った外観である。

前記申請書類とは別に、昭和4年9月付の建築申請書類¹¹⁾が残る。この際の計画では外観には唐破風は設けず、出格子を備えた外観となっており、タイル貼りも見られない(図9)。この申請書類は翌5年9月22日付で京都府認可を受けた後、急遽外観意匠の変更がなされたと考えられる。最終的には約1ヶ月後に現行の外観案で認可を受けて、施工されたと判断される。

脱衣場内部は、1階を番台、男女脱衣場とし、格天井としている。浴室との境の壁

面にはマジョリカタイルが貼られる。脱衣場の東端部分に階段が設けられ、2階には和室4室が設けられている。

浴室は平屋建で、浴室左右と釜場境の壁に、煉瓦壁を用いた木造である。浴室中央の屋根は一段上げ、明り取りとする。内部は、中央に男女浴室境の仕切壁があり、この壁面及び四周の壁面をマジョリカタイル貼りとするのが特徴である。浴場・釜場棟の東側に附属棟が接続し、1階に板間1室、2階に和室4室を設ける。

平成11年に銭湯は廃業し、レストラン等の店舗として活用している。店舗利用に際して、浴室仕切壁の一部の取り壊し、脱衣場2階室の天井の取り外しなどの改造がなされたが、部材は保存されている。また、浴室床面・浴槽部分の上に床板を貼っており、可逆的な改変となっている。

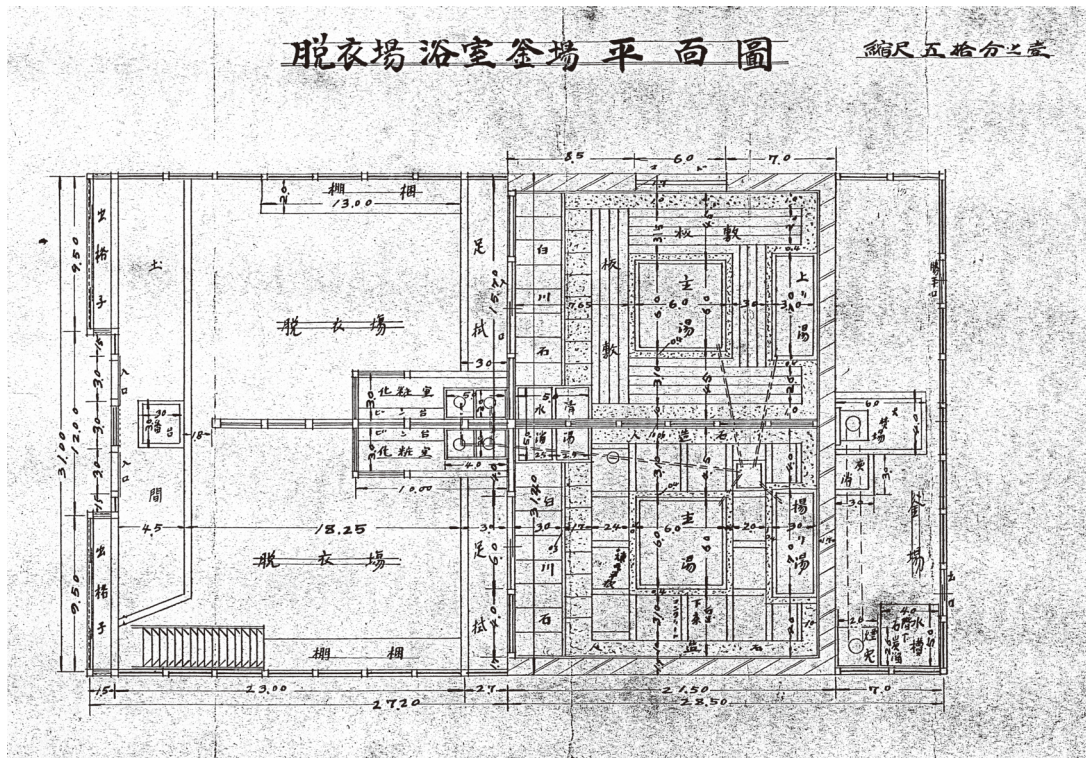


図10 紫野温泉設計時平面図（青焼図面を反転）

4. 紫野温泉

大野松之助の経営により、船岡温泉の西寄り、鞍馬口通り北面に営業していた銭湯である。大正10年に娘・定の名義で敷地を購入している。建築年代に関する資料は残っていないが、昭和2年2月作成の土地測量図が残る¹²⁾。間取りによれば藤ノ森湯よりも開業時期が若干早いとされ、昭和3～4年頃に開業されたものと推測される。

設計時資料と考えられる図面¹³⁾によれば、木造2階建の脱衣場部分と、煉瓦壁を用いる浴室部分からなり、内部の構成も藤ノ森湯とほぼ同様である（図10）。

間取りでは、藤ノ森湯と同様に、唐破風を設け、腰にマジョリカタイルを用いた外観であったと伝わる。昭和42～43年頃に廃業し、建物も現存していない。

5. 船岡温泉と藤ノ森湯の意匠について

●外観意匠

船岡温泉、藤ノ森はともに唐破風を備えた外観である。船岡温泉の唐破風は、昭和3年に増築されたことが確認される。また、藤ノ森湯では昭和4年の設計時には唐破風がなく、昭和5年の設計変更により、最終的に採用されている。

唐破風を設ける銭湯建築の外観は、一般には、大正末期から昭和初期に普及したものとされている。京都市内には昭和初期に遡る銭湯建築が比較的多く現存し、唐破風を備えた建物も見られる。しかし、建築年代の確認されている銭湯建築は錦湯（昭和2年）¹⁴⁾、日の出湯（昭和3年頃）¹⁵⁾、柳湯（昭和6年）¹⁶⁾など僅かである。この3

件の銭湯建築はいずれも唐破風を備えていない。唐破風を設けた銭湯建築として紹介されている事例としては朝日湯（昭和9年，現存せず）¹⁷⁾，長者湯（昭和11年）¹⁸⁾があげられ，やや年代が下ることが分かる。

昭和3年～5年の時期は，京都の銭湯建築に唐破風が出現した時期であった可能性も推測される。しかしながらここでは可能性を指摘することにとどめ，類例調査を待つことにしたい。

●内部意匠

船岡温泉，藤ノ森湯にはマジョリカタイルが多用され，特徴的な意匠を構成している。

船岡温泉浴室，旧理髪店のマジョリカタイルには裏面の商標が確認できるものがあり，川村組による「マルホン・タイル」であることが判明する（写真18・19）¹⁹⁾。また，藤ノ森湯のマジョリカタイルには商標から佐藤化粧煉瓦工場の製造と確認される

ものがみられる²⁰⁾。

なお，確認することのできたマルホン・タイルのカタログ（図11・12）²¹⁾には，「六^{インチ}吋角」規格の「マジョリカ」タイルとして，16種類の図柄が掲載されている。同資料を参照すると，船岡温泉と藤ノ森湯に

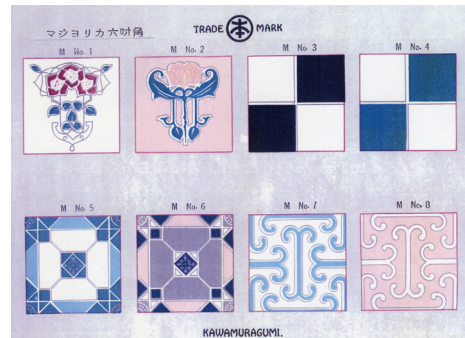


図11 マルホンタイルカタログ



図12 同上



写真18 船岡温泉旧理髪店マジョリカタイル（表面）



写真19 同裏面商標



写真20 船岡温泉脱衣場隅部分の木彫

使用されている雷門模様のタイルがカタログ中の図柄と一致する他、類似したものがみられる。装飾タイルとして「マジョリカタイル」が流布していたことが確認される。

また、船岡温泉では、彫刻欄間も意匠上の重要なアクセントとなっている。彫刻欄間の一部には彫師の銘が残る。脱衣場の隅部には持送り状の彫刻があり、その一つには「堺彫又」と刻まれている（写真20）。「堺彫又」は、江戸後期から昭和初期に泉州地域の社寺建築や地車（だんじり）の彫刻に活躍した「彫又一門」と推測される²²⁾。

また、南側面の鶴及び松をモチーフとする欄間には「子緑刀」と刻まれているが、製作者の特定には至っていない。

葵祭、賀茂競馬、今宮祭のような周辺地域や京都の代表的な祭礼をモチーフとすることに加え、後の改修時には「肉弾三勇士」という同時代の事件を題材とした彫刻が付加されている。これは船岡温泉が一般の銭

湯とは異なる浴場施設であり、非日常的な娯楽空間としての意匠が必要とされたことによるものと推測される。

こうした空間の娯楽性が施主によって追求された結果、藤ノ森湯においても、当時流行していたマジョリカタイルを用いる意匠に繋がっているのではないだろうか。

6. 大野松之助の銭湯経営

船岡温泉建築時の大正12年当時における鞍馬口通は、一部を除いてほぼ田畑であったことが旧土地台帳より確認される。船岡温泉の所在する現紫野南舟岡町の宅地への地目変更は昭和2年から6年頃に集中しており、昭和初期に宅地化が進んだことが分かる²³⁾。このように、旅館・船岡楼は、郊外の農村地域の立地に建築されたと言える。昭和5年撮影の古写真（写真21）²⁴⁾では、船岡楼の屋根上に物干台が設置されている。聞取りによれば、五山送り火の際に



写真21 船岡温泉旧船岡楼古写真（昭和5年撮影）

は、旅館の利用者が物干台の上で宴会を催したとされる。船岡楼は市街地から離れた郊外の遊興施設として建設されたものと言えよう。なお、戦後、旅館・船岡楼は廃業し、特殊船岡温泉は銭湯としての営業に転換している。

一方、藤ノ森湯、紫野温泉は、当初より銭湯として開業している。銭湯の営業は一定の市街化により利用者としての住民が確保されることが条件と考えられ、両銭湯は鞍馬口通を中心とした同地域の市街化に対応した業態であったと思われる。

大野松之助が庭石商からの転換を図っていた時期、鞍馬口通り周辺は郊外の農村部から市街化しつつあった。このため、一地域において、温泉を有する旅館と、銭湯という性質の異なる経営を同時に行なうことになったのである。戦後、船岡温泉もまた地域住民を顧客とする銭湯へと転換する。

船岡温泉と藤ノ森湯は、特徴的な銭湯建築としてのみではなく、大野松之助の取り組んだ温泉・銭湯経営の様子を想像することができる場としても、重要かつ興味深い建築であると言えよう。

本稿は、『京都市の近代化遺産—京都市近代化遺産（建造物等）調査報告書』（京都市文化市民局、2006年、pp.62-64）に発表した原稿に、新出資料による知見を加え、大幅に加筆、修正したものである。

註

- 1) 肖像画には「金嶺」の署名があるが、詳細は不明である。(船岡温泉・大野義男氏所蔵。以下、特記のない場合は同氏の所蔵)
- 2) 設計変更申請書類（大正13年3月31日付申請、日付不明の認可印あり）
- 3) 「舟岡温泉舟岡楼 貸家 平面図配置図」（昭和2年、京都工務所作成）
- 4) 建築申請書類（昭和7年8月15日付申請、清水組京都支店）
- 5) 改築図面（昭和10年8月23日京都工務所作成、同年9月17日付京都府認可）
- 6) 「船岡温泉場建築設計図」（年代不詳）
- 7) 建築申請用「配置併平面図」、「湯屋正面図」（昭和3年3月10日付京都府認可）
- 8) 前掲註4
- 9) 前掲註3
- 10) 建築申請書類（昭和5年10月21日付京都府認可、京都工務所）
- 11) 建築申請書類（昭和4年9月7日付申請、昭和5年9月22日付京都府認可、京都工務所）
- 12) 「土地測量図 昭和貳年貳月実測 京都工務所」
- 13) 「新設湯屋建物配置図」「新設湯屋設計断面図」「脱衣場浴室釜場平面図」（いずれも年代不詳）
- 14) 『京都市の近代化遺産—京都市近代化（建造物等）調査報告書—近代建築編』（京都市文化市民局、2006年）、p.66
- 15) 「京都市文化財マネージャー育成講座第5期4班修了課題報告書 日の出湯」（2013年）
- 16) 『京都岡崎の文化的景観調査報告書』（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編集、京都市文化市民局発行、2013年）、p.203
- 17) 林宏樹『京都極楽銭湯読本』（淡交社、2011年）、P.11に古写真掲載
- 18) 町田忍監修、松本康治『関西のレトロ銭湯』（戒光祥出版、2009年）、PP.62-63
- 19) 日本のタイル工業史編集委員会『日本のタイル工業史』（株式会社 I N A X、1991年）、p.460。川村組は三重県四日市市に所在した。明治8年に川村又助が陶磁器の間屋業を始

- め、後に製造業となる。同32年に合資会社、昭和5年に株式会社川村組となった。
- 20) 前掲19), P.461。岐阜県多治見市に所在。大正5年に、佐藤貞治が工場を設立し、内装用白色硬質タイルの製造を開始した。昭和5年、上山化粧煉瓦工場となり、同22年に上山製陶所に変更。
- 21) 「MARUHON.TILE CATALOGUE」(平田常次郎商店建築陶器部, 年代不詳), 木村琢郎氏所蔵
- 22) だん吉友の会『大坂浪花木彫史 近世大工彫刻の系譜』(1992), pp.175-218
- 23) 法務局所蔵の旧土地台帳, 閉鎖登記簿より南舟岡町の地目等変更の時期について確認した。
- 24) 裏面に「昭和五年拾貳月吉日寫ス 船岡楼旅館部全形トス」と記載。

いしかわ ゆういち
石川 祐一 (文化財保護課 主任 (建造物担当))